

ACNU (MCNU) を 50mg/20 ml/1 min. の高流量で注入した。外頸動脈へは目的血管へカテーテルを挿入し、他の主な枝へバルーンカテーテルを入れて血流を遮断し、CDDP 100 mg を30分で注入した。症例：脳腫瘍6例(悪性グリオーマ5例、悪性リンパ腫1例)、転移性頭蓋骨腫瘍2例。

【結果】組織学的に再発であることを確認した、47歳、大脳 glioblastoma 1例にたいし、ACNU 動注を単独で施行、計4回の投与で一時的に CR となった。再発後2年生存したが、再々発後には本法は効果はなかった。69歳の大脳 glioblastoma 例は、放射線治療と本法にて4ヶ月再発なく生存している。77歳、大脳 glioblastoma 例は、放射線療法と3回の動注療法で、再発なく1年経過している。頭蓋骨腫瘍の2例は、いずれも動注療法のみにて CR となり、頭部に関しては再発なく、2年以上生存している。全体の評価は CR 3例、PR 1例、PD 1例であった。副作用に関しては、76歳、77歳例にも行ったが、本法による副作用は殆どなかった。1回1側投与量を、50mg としていることも副作用の少ない原因と思われる。

【結論】動注療法は高流量投与など工夫を行うことにより、脳腫瘍や頭蓋骨腫瘍の治療に対して有効な症例がある。投与量などを工夫することにより、高齢者にも使用できる、副作用の少ない有効な治療方法になりうると考えられた。より有効な化学療法剤の開発が待たれる。

5 Plaque 状に subarachnoidal に拡がった atypical meningioma の1例

原田 篤邦・江塚 勇 (新潟労災病院)
柿沼 健一・高橋 麻由 (脳神経外科)
高橋 均 (新潟大学脳研究所)
(病理学分野)

はじめに：meningioma はくも膜のみに付着したものは稀にはあるが、通常は硬膜に強く付着した結節状の腫瘤である。また、plaque 状に拡がるものとしては meningioma en plaque が挙げられるがこれは硬膜に沿った発育形態を示すものである。今回非典型的な画像所見を呈し手術所見や、病理学的から atypical meningioma と診断した

症例につき報告する。

症例は58歳の男性で一過性の左不全片麻痺を生じ前医受診。MRI で異常を指摘されて、当科紹介受診した。神経学的には意識障害や性格変化なく、左下肢の軽度の麻痺を認めるのみであった。MRI では parafalx から convexity に拡がる、T1WI 等信号、T2WI 等信号で Gd enhancement で著明に増強される plaque 状に拡がる mass で、meningeal carcinomatosis, 特発性肥厚性硬膜炎や Rosai Dorfman disease, Lymphoplasmacyte-rich meningioma などが疑われた。手術所見は、腫瘍はくも膜下腔から一部脳に食い込むように存在し、falx や dura との付着点は認めず、脳表の動脈を involve して発育した固い、whitish なもので部分摘出にとどめざるを得なかった。病理は HE 染色で fibroblastic meningioma の像で、S-100 陽性、EMA 陽性、Vimentin 陽性とその所見は meningioma として矛盾はなかったが、MIB-1 index が 5.3% ~ 15.5% (平均 8.0%) と比較的高値を示すこと、画像所見、手術所見からは一般的な meningioma としては発育様式が極めて特殊と思われ、atypical meningioma と診断せざるを得なかった1例を報告した。

6 高齢者髄膜腫の手術例

森 修一・源甲斐信行 (水戸済生会総合病院)
鈴木 健司・早野 信也 (脳神経外科)

髄膜腫の治療において高齢者の手術治療成績は必ずしも悪くはないが、高齢者特有の種々の術後合併症や生存期間など良性腫瘍ゆえに治療上多くの問題点があり、手術適応には慎重たるべきとされている。

今回当施設で経験した70歳以上の症候性髄膜腫について検討したので報告する。

過去3年間に手術治療を行った髄膜腫は20例で、70歳以上の高齢者は6例(30%)であった。全例女性。年齢は72歳-87歳、平均78歳であった。発生部位は円蓋部2例、傍矢状洞、大脳鎌、蝶形骨縁、鞍結節各1例であった。

入院時主症状は、頭痛、片麻痺、てんかん発作、